資料4

外来種の動植物対策

植　物

オオキンケイギク（特定外来生物）

日本には1880年代に鑑賞目的で導入された。繁殖力が強く、荒地でも生育できるため、緑化などに利用されてきた。河川敷や道端の一面を美しい黄色の花々で彩る本種は、緑化植物としても観賞植物としても非常に好まれた。しかし、カワラナデシコなどの在来種に悪影響を与える恐れが指摘され、栽培・譲渡・販売・輸出入などが原則禁止された。

オオブタクサ（旧要注意外来生物）

日本への侵入経路としては、アメリカから輸入した大豆に付着したオオブタクサの種子が、豆腐屋などで廃棄され発芽したものといわれている。

同じ属の帰化植物であるブタクサとともに花粉症の原因として知られ、日本国内ではスギ、ヒノキに次ぐ患者数が存在するとされる。

植　物

アレチウリ（特定外来生物）

近年では各地の河川敷などで群生して広い草ヤブを作っている。鋭い棘があるため果実そのままを食べる鳥はいないが、地面にこぼれ落ちた種子は野鳥が食べ、そのふんに混じり周辺部や山間部にも拡散している。河川敷では特に増水に伴い上流から下流に拡散している。

セイタカアワダチソウ（旧要注意外来生物）

①日本に天敵や病害虫がいない

②地下茎でも種でも増える

③群落をなして生育し、他の雑草が生えない

④他の植物を枯らす物質を出す

植　物

オオカワヂシャ（特定外来生物）

原産は、ヨーロッパ、アジア北部であり、温帯～熱帯に分布し、河川の岸辺や湿地などに生育する。

種子や地下茎からのクローン成長によって分布を拡げる。在来種カワヂシャ（準絶滅危惧種）と交差して雑種を形成し、遺伝的攪乱が生じる。繁殖成長が著しく、他の植物の生育を阻害したり植物種を排除し、置き換える。

オオハンゴンソウ（特定外来生物）

北アメリカ原産で、明治中期に観賞用に導入された。

キク科の多年生草本で、高さは0.5m～3m程度になる。

寒冷な土地にも分布し、荒地、湿原、河川敷などに生育する。

戦場ヶ原では、寒さや湿地に強く盛んに繁殖するため、在来種の減少が見られ、湿原植物を保護するために毎年刈り取られている。

魚　類

ブルーギル（特定外来生物）

北米原産の外来種。小動物から水草まで食性は幅広く、汚染などにも適応力がある。在来魚種の卵や稚魚の捕食など日本の池沼の生態系の脅威となっている。

霞ケ浦、琵琶湖など駆除

オオクチバス（別名：ブラックバス）特定外来生物

全国の池沼に生息する人為的に移入された外来種。

在来種（メダカ、ゼニタナゴなど）希少な魚を減少させ魚類相に大きな影響を与えている。釣りの対象魚として人気がある。

アメリカザリガニ（旧要注意外来生物）

昭和2年ウシガエルのエサとして日本に移入された。

雑食性で水草を切断したり、水生昆虫を捕食するなど陸水生態系に影響を与える。水田の畔に穴をあける。稲の根を食い荒らす。

は虫類・両生類

カミツキガメ（特定外来生物）

大型で食性が幅広く在来種への影響が懸念される、捕まえた際に咬傷被害が想定されるなどの理由から、2005年に特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律施行に伴い特定外来生物に指定された。

ウシガエル（特定外来生物）

大型かつ貪欲で、環境の変化に強く在来種に対する殲滅的捕食が懸念されている。日本を始めアメリカや韓国では在来カエルの減少が問題視されており、本種が生息している水域では他のカエルが見られなくなってしまった場所もある。日本の侵略的外来種ワースト100に選ばれている。

哺　乳　類

アライグマ（特定外来種）

雑食性で小動物を捕獲して食べる。

北アメリカ原産の外来種。

農作物への被害や生態系への影響などが問題となっている。